

京都大学地理学談話会

会 報

第21号



2010

[目 次]

寄稿

- 持続する「若々しい身勝手」…………… 小林 致広(1972年卒) 1
地理学と私—これから就職をされる方へ—…………… 岩田 憲司(1996年卒) 4

秋季地理学談話会の報告 …………… 8

- 〈OB交流会〉 講師：橋爪拓也(2006年卒)，西田幸代(2008年卒)
〈講演会〉
 研学生活五十年—若い方々に伝えたいことなど— ……佐々木 高明(1955年修)

研究室便り

- 〈総合博物館における地図資料等の利用について〉…………… 11
〈地理学教室への寄贈図書～2009年度～〉…………… 11
〈研究室の動静〉…………… 16
 〈3回生、聴講生、修士1回生の自己紹介〉
 〈2009年度の実習旅行〉
 〈学部卒業生・院生の進路〉
 〈院生の研究状況の報告〉
 〈2010年度講義題目〉

事務局から

- 〈地理学談話会2009年度会計報告〉…………… 19
〈訃報〉…………… 20
〈住所不明者についてお願い〉…………… 20
〈オープンキャンパス：2008年度の報告と2009年度のお知らせ〉…………… 21
 〈2009年度地理学談話会のお知らせ〉…………… 21
 〈地理学教室所蔵の写真資料について〉…………… 21

寄稿

持続する「若々しい身勝手」

小林 致広(1972年卒)

地理学教室の教授就任に当たって寄稿を頼まれたが、何を書けばいいのかわからない。私自身、去年まで談話会の運営維持会費は払わず、会報にじっくりと目を通したこともない。葛川絵図研究会の活動を通じて多少ともあった地理学業界との関係も、1980年代末のメキシコでの在外研究を機に疎遠となっていた。会報読者の大半は平成時代の卒業だから、私が客員教授にという会報20号の記事に関しても、「なぜ、彼が客員教授に？」というより、「いったい、誰なの？」という声のほうが多かったはずである。業界からはぐれ猫のように出立した私には、地理学教室の関係者をめぐる心温まるような隠れネタの持ち合わせはない。去年の会報の坂本勉くんには負けるが、20歳から11年間、地理学教室に滞留した者の若気の至りのたぐいの話しかない。メソアメリカのエスノヒストリーという歴史学・人類学・地理学・言語学・社会学が混在状態の分野に迷い込み、正業に就かなかった私と同じ轍を踏まないための助言ならできそうである。

私の入学年は1968年である。当然ながら大学解体・造反有理の気分が充満していた。教養部の1・2回生時代、ほと

んど授業を受けなかった。通常の試験を受けた記憶はなく、レポートだけで卒業できた私たちの学年はもっとも勉強をしなかった世代と言えよう。3回生で地理学に進んだが、地理学についての体系的な基礎教育は皆無だった。卒論のテーマを相談したことはなく、小さな共同体の文化＝生活様式の調査なら、何とかなると思ったに過ぎない。卒論の調査地を選んだ基準は現在の学生とほぼ同じで、アクセスが便利で出費が少ない場所となる。

生まれ故郷に近い中国山地の広島県豊松村（当時）で、夏休みと秋2回、小学校教師が間借りする家に居候し、集落の家族構成や営農状況の悉皆調査、土地利用図作成作業、広島大学の収集から逃れた幕末の検地帳、荒神祭記録の筆写などを行った。特に関心があったのは荒神祭の運営単位の苗（みょう）という社会組織だった。調査地では民俗学者宮本常一さんと民族映像作家姫田忠義さんの調査チームと出くわした。あるインフォーマントの家で実施された年中行事や農耕儀礼は、数年後に開館した国立民族学博物館ビデオテークの映像資料になっていた。

当初、税務署関係者かと言われていたが、「京大の学生さんが調査している」という噂が広まり、訪問先で食事を頂くこともあった。村内に飯屋が2軒しかいないため、昼飯の確保が一番厄介で、家裏にある栗を無断で拾い、生のまま食べたこともある。だが、鮎寿司（酢締めのアユにおからを挟んだもの）、ジンギスカン、アブサン（現在は入手不能）など未経験

の食べ物を戴くこともあった。晩秋、囲炉裏端で聞き取りをしているうちに酒となり、沈没することもあった。

大学院進学以降の研究テーマの設定もやはり思い付きだった。学部時代の大学院生には、タイ（田辺繁治さん）、西アフリカ（赤坂賢さん）、ユーゴスラビア（小林茂さん）、アメリカ南西部（久武哲也さん）など、海外で現地調査を行っていた人たちがいた。こうした人たちとの付き合いのなか、日本の農山村の共同体研究よりは国外のほうが面白そうだと、思い込むようになっていた。こうして、調査対象地としては、競争相手となる研究者が多い東南アジアやアフリカでなく、中南米を選んだ。ボリビア山中のゲリラ戦で死んだゲバラの世界革命戦争とか、当時の第三世界主義の台頭のことなどが頭の片隅にあったに違いない。

当然、関西圏に指導を仰ぐことのできる研究者はおらず、アンデス研究の本拠だった東京大学の増田義郎さん、上智大学の高山智博さんを訪ね、中南米のエスノヒストリー研究の手ほどきを受けた。また、大航海時代資料収集家の井沢実氏からは貴重な初版本などを拝借した。初対面だったが、ハバナ葉巻を喫わせてもらい、南米での戦争捕虜の体験談を伺った。私の連絡先が分からなかった高山さんは、資料返却を督促するため、水津一朗教授に連絡せざるをえなかったという。

エスノヒストリー研究に不可欠なスペイン語も、修士課程進学後、独力ではできなかった。大学院でのスペイン語担

当教員は、後に勤めることになる神戸市外国語大学イスパニア学科の林一郎教授だった。「セルバンテスを読みます」という一言で、出席する気は萎えてしまった。ラジオ講座の悠長なペースでは間に合わず、とにかく無理やり資料を読むしかなかった。

2年ででっち上げた修士論文のタイトルの副題には、地味な地理学とは縁遠い「夢」という言葉があった。今、考えれば、ポストモダンを先取りしたタイトルだが、夢物語のような大風呂敷だった。イロハから始めた人間が2年間でまともな研究成果など出せるはずはない。しかも、修士課程の2年、研究に没頭していたわけではない。学部時代の延長でエル地下に出入りし、当時の学内の竹本処分問題、あるいは文学部西洋史学教室「女子学生差別事件」糾弾活動などに付き添い、夏休みには三里塚に援農にも行っていた。当然、ずっと博士課程に進めるはずはなく、博士課程編入に向け、1年間の雌伏の時を費やすことになる。

編入試験に当たって目先を誤魔化すため、地理学の伝統的な枠組みに納まる「新スペインに関する地理的認識の拡大―地図の分析を中心に」と題する提出論文を作成した。一方、修士論文で扱ったアステカ帝国形成に関する論文を『史林』に投稿した。この研究の副産物として『季刊人類学』に書いたのが、アステカの絵文字に関する試論「メヒカの絵文字」である。言語学の西田龍雄教授から「論理を理解しにくい」という留保つきのコメ

ント、上智大学の高山さんから、「メヒカ」は「メシーカ」と表記すべきという初歩者の無知を指摘されることになる。修士論文の大風呂敷にあった個別ネタを発酵させ、異分野の論文として膨らませた。研究分野の枠組みに拘っていたら、こんな芸当はできなかつただろう。

博士課程編入後も、諸先生の心労に気付かず、先輩たちの忠告も気にしなかった。周りの空気を読まず、好きなことをしてきた。同僚たちが次々と大学に職を得るなか、私といえば、いくつかの「公募」人事に申請していたものの、門前払いの連戦連敗だった。要領の悪さによる失敗談をひとつだけ紹介しよう。京大の人文科学研究所の社会人類学部門助手の採用試験で、研究所の基本方針である共同研究に関する姿勢を問うものがあつた。しかし、私は「共同研究をする気は毛頭ない」と書いた。面接では、当時の研究所長河野健二さんからも質されたが、同じことを答えた。谷泰さんは、「彼らしくて正直でいい」と他の面接委員に弁明していただいたが、本心は「なんてバカなことを」と叱責したかったに違いない。

国内で研究職に就けそうもなく、青年海外協力隊のボリビア調査員に応募したこともある。今話題になっているウユニ塩湖周辺の共同体調査をしたいという申請書を作成した記憶がある。メキシコ外務省と日墨交流協定の奨学金に応募していたが、博士課程在学のため、どちらもフリーパスだった。結局、後者の奨学金でメキシコ人類学歴史学研究所に客員研

究員として赴くことになった。会話力がゼロ状態でメキシコに赴いたため、研究者と議論することはあまりなかった。むしろ、山村工作隊のように先住民居住地域で活動していた学生・知識人とも親しくなった。現地では、人類学図書館に通い、資料の写真をとりまくった。

留学から帰国後、単位取得のうえ博士課程を退学する。その当時、大学院博士課程修了時点で研究職に就けない人は皆無に近く、地理学教室の研究職就職状況は「好景気」だった。しかし、私は、神戸市外国語大学に拾ってもらうまで、2年間の浪人生活をするようになる。予備校・塾講師や家庭教師で糊口を凌ぐことになるが、職探しには業界外での付き合いのネットワークが役立ったといえる。

周辺を巻き込んだ失敗談はいくつもあるが、所詮は「若々しい身勝手」、つまり若気の至りの与太話にすぎない。だが、その後の30年で、「若々しい身勝手」が徐々に縮減し、人間的に成長した形跡はほとんどない。還暦を過ぎても、周囲の空気を読む心構えは皆無に近いといえる。こうなると、初老の我儘でしかない。だが、実際の若き世代の「若々しき身勝手」なら、周囲もある程度は許容してくれるだろう。多少なりとも、周囲に迷惑をかけてもいい。既成の枠組みや境界に拘ることなく、自分の進む道を切り開くため、あちこち迷うのもいいだろう。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

地理学と私

ーこれから就職活動をされる方へー

伊藤忠商事(株)

岩田 憲司(1996年卒)

大学3年生後半から就職活動に取り組んでから早くも15年が経ちました。人事部にて採用担当を経験したことも踏まえ、これから就職活動をされる学部生、院生の方に自分の考えを少しでもお伝えできればと思います。

1 地理学との出会い

そもそも私が地理学という選択をしたのは本当に偶然が重なったことでした。

奈良県出身かつアンチ東京であったため、高校に入ると自然と関西の雄である京都大学に行きたいという思いが強くなりました。周囲では法学部か経済学部を選択する人が多く、数学があまり得意でない私はあまり深く考えないまま法学部を志望していました。

高校3年生の夏、受験勉強にも疲れてきたことから、気分転換を兼ねて友人と京都大学を見学することにしました。伝統的な建物やサングラスをかけた謎の人達に感動を覚えた後、時計台の中にあった本屋に入りました。入口の推薦図書コーナーに京都大学新聞社出版の「京都大学を知る本(全学部学科の解説本)」がありました。漠然と人と違うことがしたいと思っていたことから、時間を見つけて

は文系の全ての学科の解説を何度も熟読しました。その中で「地理学」という専攻を発見しました。元々一人旅が好きだったこともあり高校の地理の先生に意見を求めてみました。「文系やったら京大の地理が日本で一番や。でも高校では覚えることが中心やけど大学では考えることが中心やから全然違うぞ」という答が返ってきました。

これが京大で地理学を希望した背景であり、実は文学部を希望した訳ではなかったのです。

2 入学～就職活動

テニスサークルとアルバイトに明け暮れる典型的な京大生だったため、恥ずかしながら教養課程の授業はほとんど覚えていません。ただ、足利先生の人文地理学の授業だけは鮮明に記憶に残っています。特徴的な地名の由来につき地形や歴史背景を含めて解説されていた姿は私がイメージしていた地理学にかなり近いものでした。

専門課程に入ってから心を入れ替え、地理学の授業は全て出席する方針に変更しました。成田先生には都市地理学の概論を教えて頂き、3年の秋頃には「地理学とは何か」ということを少しは理解できたと思います。

時を同じくして就職活動が始まりました。元々大学院での研究志望はなく、少しでも早く実社会で仕事をしたいと考えていたため、就職活動を始める時点での悩みはありませんでした。先ず初めに親

しいテニスサークルの先輩や親にどうやって就職活動をしたら良いか相談してみました。その後、就職活動を通じて文学部というだけで一部の企業から募集の対象外となることに気づいたため、むしろ「学部不問で人物採用してくれる会社を自分が選ぶ」ことに心を決めました。

私には当時「不動産開発を通じて地図に残る仕事をしたい」という夢がありました。大手不動産会社数社を第一志望にしていたのですが、文学部を募集対象にしていないことが分かったため、代わりに不動産開発が本業ではないものの、これから力を入れようとしていた鉄道会社、ハウスメーカー、総合商社を希望することにしました。結果的にはこの過程を通じて自分の知らない業種にも視野が広がったと思います。

どの会社でも聞かれたことは「地理学ってどんな学問なの？」という点です。単純な疑問が一番難しく、自分が一番良く理解していた分野であった経済地理学の話をする「それって経済学部じゃないの？」という質問が続きました。当時の私には1～2分で地理学とは何か説明することは至難の業でした。

面接で苦勞することが分かってきたため、名前と顔を覚えてもらうことも期待して人事部の若い採用担当者に極力話をするように心掛けました。伊藤忠商事とJR西日本の人事担当者には色々相談に乗って頂いたこともあり、どちらかに就職したいと強く希望する様になりました。総合商社を選んだのは「不動産開発に携

わりたい」という理由に加え、当時勢いよく展開されていたコンビニを通じた食品流通網の開発にも興味があったことも理由でした。伊藤忠商事からは無事内定を得ることができましたが、残念なことにJR西日本は縁がなかったようです。

今から振り返ると内定に至った要因は「運と縁を大事にする」ということでした。自分のやりたいことを突き通すことも大事ですが、自分に合わない会社では就職後苦勞します。むしろ、自分という存在に興味を持ってくれる会社かどうか、という観点の方が大事だと思います。

内定を得て安心した後大学4年の秋～冬にかけて纏めた卒業論文のテーマは「観光地のメンタルマップ」でした。元々不動産開発に興味があったことがきっかけでしたが、成田先生に卒論のテーマについて御相談すると、「なかなか面白いテーマだね。君の興味あることに挑戦して下さい」との暖かい回答を頂きました。若者・中高年齢者がそれぞれ日本のどの観光地をどの程度訪問したいと考えているか、つまり観光地のイメージを定量化し、地図に等高線を記入するのと同じ手法でメンタルマップを作成しました。卒論作成中は参考文献が少なかったこともあり悩みに悩みましたが、幸いにも卒業論文は成田先生に高く評価して頂き、今となっては懐かしい良き思い出です。

3 人事部採用担当

伊藤忠商事の入社式で受け取った辞令は「大阪人事部」でした。営業希望であ

ったため人事部配属には非常に驚きましたが、採用担当であれば面白いかもしれないと自分に言い聞かせました。

入社してすぐ上司に「なぜ私を採用したのか？」と質問した所、意外な答が返ってきました。「君は自己紹介カードに図を書いていただろ。普通は文章でしか書かないのに図を使って志望動機を説明していたから印象に残っている」とのことでした。私は長々と志望動機を文章で書いても人との違いを出せないし、第一分かりづらいと思っただけでしたが、地理学で身に着けた俯瞰的に物事を見る技術が知らず知らずの内に就職活動の自己分析にも役立ったのだと思います。

当社の採用基準は簡単に言えば「面接官と一緒に働きたいと思うか？」ということだけです。「大学で何をやっていたのか？」「会社に入ってから何をやりたいのか？」という点も注視していますが「潜在能力があり、きちんと受け答えができる人」という観点をより重視しています。私自身、正しい面接ができているか悩むことが多々ありますが、限られた時間の中、極力良い所を見るようにしています。なお、国立大学の学生は面接慣れをされていない方が多いですが、会社もその点は理解しており、気にする必要はありません。私自身、上手く話せなくともしっかりした考えがあれば良いと考えています。また、面接の最後に会社に対して積極的に質問があるかという点も実は見ていたりします。

勿論、会社によって採用基準は大きく

異なるため注意が必要ですが、就職活動をしている学生自身にも職業選択の自由があり、自分の生き方に合った会社を選択することが重要です。繰り返しになりますが、やりたい事、憧れだけで会社を選択すると、自分を会社という箱に無理に合わせることになりかねません。素直な自分を認めてくれる会社を選ぶことが大事ということを忘れないで下さい。

4 労働省出向と留学

入社後2年半ほど大阪で勤務しましたが、その後東京の人事部へ転勤となりました。たまたま当時の労働省から人材交流の話があり、役所へ出向する希望があるか上司から確認されました。私自身「商社マン」になりたくて入った会社でしたが、人と違う会社人生も面白いのではないかと前向きに捉え、出向が決定しました。配属は職業安定局雇用政策課という所で、国の雇用対策を一手に引き受けている部署でした。普通の国家公務員と同様に毎晩雇用情勢に関する質問に備えるため国会答弁作成を行い、雇用対策法という法律改正作業も経験しました。地理学とは無縁だと当初考えていましたが、労働者の雇用調整が必要となった産業は各地域経済に重大な影響を与えるものが多く、雇用の確保という観点から東京への一極集中の問題や海外への生産拠点移転の問題を深く考える良い機会となりました。

2年間の出向後、東京の人事部にて労使交渉の担当となり、その後女性の活躍

支援の仕事も経験しました。商社はまだまだ男社会であり、総合職と呼ばれる基幹的な仕事をする社員のうち、女性の採用は10%程度でした。これを倍増するという目標を掲げた結果、現在では約3割が女性となりました。これらの活動には労働省出向の経験が活きたと感じています。最初は誰も興味を持たないと感じる仕事でも地道に続けていれば、いつか花が咲くときが来ます。大事なことは「どんなことでも手を抜かず一生懸命やる」という単純なことだと思います。

気が付くと30歳になっていました。自分では一通り仕事ができるようになったと勝手に考える様になり、これからどうするか一人で悩んでいました。どうしても人事部でずっと仕事をするイメージが湧かないと考えていた時、営業から新しく来た部長に「一度海外へ留学してみてはどうか？」と言われました。正直驚きました。人事部は数多くの留学候補生を面接し、派遣を決定する部署でしたが人事部から留学した人がいなかったからです。商社マンのくせに英語を使う機会もなく自信もありませんでした。これまで心のどこかで自信がなかった「文学部出身の商社マン」から自己変革する良い機会になると信じ、2年かけて仕事の合間を縫って勉強し、米国ミシガン大学のMBAに合格することができました。

ミシガン大学はデトロイト近郊のAnn Arborという人口10万人程度の小さな町にある総合大学です。私自身経済学の知識がないため、General Managementを重視

し、特にStrategyと呼ばれる経営戦略が有名なミシガン大学を選びました。30歳過ぎてからの勉強三昧の日々は非常に厳しかったですが、京大と同様に勉強については学生の自主性に委ねられており、結局は自分との戦いでした。紙面の関係で詳細は省きますが、2点だけ気づいたことを記します。

1点目は「自分が井の中の蛙である」と強く認識したことです。伊藤忠商事それも人事部という小さな組織の中で慢心していたと痛感しました。英語で不得意な経営学につき議論することは非常に難しく、文献を読む速度も米国人の4-5倍はかかっていたと思います。考えてもみなかったことに対し、「君が社長ならどう判断するか？」と問われ続けた日々は予想を遥かに超える悶絶の連続でした。

2点目は「世界の日本離れが予想以上に進んでいる」ということです。10年前はミシガン大学MBAにも日本を研究する講座が4～5クラスあったそうですが現在はゼロ。中国を研究する講座とアジア全般を研究する講座に変わっています。同様に教授陣からも日本人の姿がなくなり、日本人学生も大幅に減少しています。クラスの中でも日本に関して取り上げられる事例は殆どトヨタのみと言っても過言ではありません。ブランド戦略であれば韓国のサムソンが取り上げられる時代であり、日本の存在感は予想以上に低い状況です。これからは日本も国内政治論争に明け暮れるのではなく、国としての競争力をどのように高めていくのか、特

に空港や港湾の競争力向上は喫緊の課題です。また、ガラパゴス諸島と呼ばれている日本独自の高すぎる規格は世界での汎用性がなく日本の製造業の競争力低下の遠因ともなっています。

地理学関係者の皆様はフィールドワーク等で鍛えた現場の実態を把握する「虫の目」に加え、高いところから俯瞰し、全体観を持って根本的な課題を発見する「鳥の目」をお持ちだと思います。

これらに加え、世の中の流れを感じ取り、未来を察知する「魚の目」を備えれば地理学が社会に発信できる力が高まります。今後も是非他の分野の研究者とは異なる視点で積極的に提言頂くことを期待しています。

5 終わりに

ミシガン大学卒業後は人事部から離れ、本社の経営企画を担当する部署で勤務しています。経営企画の仕事には社長や役員等の経営トップが正しく判断する材料を用意し、適切な時期に提言することが求められます。俯瞰的な視点で物事を客観的に分析し、仮説を立て、検証・実行して行くという過程は地理学と同じだと思います。

逆説的かもしれませんが、文学部出身でなければ就職活動で苦労もしなかったし、会社に入ってから難しいことに取って挑戦しなかったと思います。色々苦労はしましたが今となっては地理学を専攻して本当に良かったと感じています。最後に経済界では珍しい地理学出身の二

チレイ浦野会長の言葉を引用させていただきます。これから就職活動される方の一助になればと思います。

「地図を見て全体を俯瞰したうえで、現地に入って細かい事象を観察する。集めた断片的な情報を整理し、その配置を思い切って変え、新たな知見を見いだす。これが地理学の基本。全く同じやり方で経営しています。」^{*1}

^{*1} 日経ビジネス2007年1月22日号より転載

→↑←↓→↑←↓→↑←↓→↑←↓→↑
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

秋季地理学談話会の報告

2009年10月31日、文学部新館第1・2講義室において、秋季地理学談話会を開催し、大勢の卒業生や在学生の皆様にご参加いただきました。ご講演いただいた佐々木高明氏（1955年修）はじめ、OB交流会で講師をしてくださった卒業生の方々に厚く御礼申し上げます。談話会に先立って、教室見学会も企画されました。

以下、OB交流会と講演会についてご報告いたします。

<OB交流会>

卒業生の橋爪拓也氏（日本エヌ・ユー・エス(株)、2006年卒）と西田幸代氏（三菱重工(株)、2008年卒）のお二人に講師

としておいでいただき、在学当時の思い出や社会に出るまでの体験、社会に出るからの歩みを在学生たちにお話しいただき、さまざまなアドバイスだけでなく暖かい励ましもいただきました。若い世代の活発な意見交換があり、楽しい交流の機会となりました。

講師の方々と司会者（網島 聖氏（D1）と永見佳央里氏（4回生）との間で打ち合わせして、進行内容も企画していただきました。ありがとうございました。

<講演会>

研究生活五十年

—若い方々に伝えたいことなど—

佐々木 高明(1955年修)

1. 50年の研究史をふりかえって

私自身の50年に及ぶ研究生活のあとを顧み、そこで得たいくつかの考えを若い人たちに伝えられればと思って、この講演をお引受けした。私は立命館大学（地理学専攻）を卒業後、京都大学にできた新制の大学院（文学研究科・修士課程）に一期生として入学し、さらに1955年に博士課程に進学した。当時、文学部の地理学教室には、織田武雄先生を中心とした家族的な雰囲気があり、楽しく過ごすことができた（佐々木高明(1999)：大学院生のころ—博士課程第一号の回想—、『地理学談話会報』第10号、1-4頁、参照）。

博士課程で選んだ私の研究テーマは焼

畑の研究で、日本各地の山村だけでなく、1960年代初めころからは、インド・ネパール・ブータン・東南アジア・西南中国・台湾などの各地でも現地調査を行った。この焼畑研究から照葉樹林文化論への研究の発展の中から、1971年には『稲作以前』をまとめた。当時、日本文化の起源を、弥生時代より以前、縄文時代に求める議論は異端視されていたが、国内・国外各地のフィールド・ワークの諸成果の蓄積と照葉樹林文化論をはじめとする学際的な共同研究の展開（京大人文研での中尾佐助氏らとの共同研究の成果が大きい）の中から、新しい研究領域が開拓されていくことになった。

この間、1959年に博士課程を退学し、教養部の地理学教室の助手に採用された後、立命館大学、奈良女子大学で研究と教育に従事したが、1970年代頃からは、民族学的な研究への傾斜が大きくなり、また、研究行政的な事業への関わりを深めてゆくことになった。

1970年に開催された大阪万国博覧会の



跡地を利用した国立民族学博物館作りには中心メンバーとして関わることになり、1973年に準備室次長に就任。74年に創設された同博物館は77年に開館にこぎつけ、私はその翌年から10年間の大型研究プロジェクト「日本民族文化の源流の比較研究」を主宰し、91年に副館長、93年に第二代館長となった（～97年）。

また、国際日本文化研究センター（1987年創設）については、1985年から石井米雄氏らと基本構想をまとめる委員会を組織し、大阪府立弥生文化博物館（1991年設立）やタイのアユタヤ歴史研究センターの創設にも80年代後半から90年代初頭頃まで関わり、それぞれ開設を実現させた。さらに、観光文化研究所に代わる新しい組織として計画した旅の文化研究所の創設（1993年）にも準備委員長として尽力した。

民族学博物館長在任中の1995年に「ウタリ対策のあり方に関する有識者懇談会」に民族学者として参加し、アイヌ文化振興法の制定（1997年）に深く関わり、民博館長退官後は、アイヌ文化振興財団の初代の理事長（1997年～2003年）を務めることになり、日本列島の北の文化を代表するアイヌ民族の文化振興に大きく寄与することとなった。

このように、私はアジアの諸民族文化の研究と行政的な事業の展開とを両輪として活動を続ける中で、1990年代以降の私の研究の関心は日本文化論へと大きく移行した。その結果、日本文化はひとつではなく、多元的な起源を有し、多重的

構造をもち、多様性をもつものだと考えるようになった。『日本文化の多重構造』（小学館、1997）をまとめ、さらに最近には『日本文化の多様性―稲作以前を再考する―』（小学館、2009）を上梓し、その点を強調した。

2. 研究の基礎となる三つの条件

上述のような私の50年に亘る経験の中から、地理学や民族学など、現地の科学（フィールド・サイエンス）に携わる人には、そのための三つの条件が必要で、重要だと考えるようになった。それはまた研究以外の各種の社会的業務に携わる人にとっても重要なことだと思われる。

三つの条件というのは、(1)徹底したフィールド・ワークの実施、(2)広い視野からの学際研究の展開、(3)総合的・実践的な行政能力の開発である。

(1)については、適応力の幅が大きく、柔軟な考え方や行動のできる若いときこそ、フィールド・ワーク（現場をよく歩く、よく見る、よく聞く）に傾倒すべきであり、合わせて、時代の技術に対応した記録の保存と整理とを心がけることが大切である。(2)については、地域や文化などを対象とする学問を研究する者には、広く総合的な視野に立ち、隣接諸科学との学際的な研究を行うことがぜひ必要がある。この場合、共同研究には、相互信頼の関係がまず必要である。その基礎の上に立つ共同研究のなかでこそ、豊かな情報を相互に交換でき、稔りある討論が

生まれることを銘記すべきである。(3)については、年齢を重ねるにつれ、組織の運営の責任等が生じ、総合的実践的な行政能力を問われる局面が多くなる。そうした能力を十分に発揮するためには、社会貢献の意識や社会のシステム全体に対する総合的な理解とバランス感覚を鍛えておく必要がある。

このような(1)(2)(3)の条件とその展開は、前述のように、研究者のみではなく、他の業務につく人々にとっても、参考にすべき事柄であろう。

3. 情報化社会のすすむ中で

最後に、二つのことを強調しておきたい。一つは、急速に情報化の進む社会であって、氾濫する情報に流されるのではなく、正しく情報を取捨・選択し、正しい情報発信力を確立することが大切であること、第二は、真のチームワークによる優秀な共同研究を実施するためにはリーダーシップを発揮する人材が必要なことである。京都大学で学ばれる諸君は、わが国における将来のリーダー候補者である。優れた個性と優れた情報発信力とそれに基づく優れたリーダーシップ、これらは一体となって形成されるべきものと思われる。諸君が優れたリーダーシップを獲得し、の将来の発展を期されることを大いに期待するところである。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

研究室便り

＜総合博物館における

地図資料等の利用について＞

地理部門の助教は2008年度より不在が続いておりますが、当面の代替措置として、地理資料担当の教務補佐員に地図・地理資料の管理にあたっていただいております。(勤務日：火～金。勤務時間：9:00 - 17:00 (除く、昼休み))

総合博物館に収蔵されている地図資料等の閲覧・撮影などを希望される方は、お手数ですが、下記の窓口までご連絡のうえ、所定の手続きをお取りくださいますよう、お願いいたします。

京都大学総合博物館 事務室

電話：075-753-3272

＜地理学教室への寄贈図書

～2009年度～＞

個々の寄贈者のお名前は掲載しておりませんが、昨年度、地理学教室にご寄贈いただいた図書の一覧です(雑誌・定期刊行物等は除く)。これらの図書は、文学研究科図書館または地理学共同研究室に配置し、学生ならびに教室スタッフの研究・教育に活用させていただいております。厚く御礼申し上げます。

過去にいただいた図書も含めて、これらの寄贈図書は、皆様にもご利用いただけるようにしておりますので、どうぞご活用ください。

(図書)

- ・国土づくり 50 年のあゆみと 21 世紀への展望 / 国土庁編 (2000)
- ・シネマ世界めぐり
- ・空中情報ガイド 空中写真・衛星画像
- ・地図にみる関東大震災－震災直後の調査地図の初公開
- ・外邦兵要地図整備誌/藤原彰編・解説十五年戦争極秘資料集 30
- ・『国外地図一覧図』第一巻～第四巻
- ・『国外地図一覧図』第一巻～第四巻のデータ DVD
- ・『国外地図目録』第一巻～第四巻
- ・高木菊三郎資料「民国製五万分一図一覧表」(2 枚)
- ・新修 豊中市史 通史一 (付図セット)
- ・日本古代の郡衙遺跡
- ・グローバル化とアジアの観光－他者理解の旅へ (2009)
- ・新・黒船の世紀：グローバル化時代の経済戦略
- ・現代南アジアの地域システム 4 (2009)
- ・現代のアイヌ文化とは－二風谷アイヌ文化博物館の取り組み
- ・地図でみる西日本の古代－律令制下の陸海交通・条里・史跡
- ・地理学と歴史学－分断への架け橋
- ・信州水系圏をゆく (2009)
- ・燈火
- ・モダンの諸相 (2009)
- ・観光の空間－視点とアプローチ
- ・大阪府立狭山池博物館・大阪狭山市郷土資料館 共同運営記念展 狭山池復活－慶長の改修にみる先端技術－ (2009)
- ・平成 21 年度特別展 やお まち 発見 八尾の寺内町－久宝寺・萱振・八尾－ / 八・尾市立歴史民俗資料館 (2009)
- ・神陵文庫別冊 上横手雅敬原著 戦中・戦後三高小史 (2008)
- ・視線の歴史－〈窓〉と西洋文明
- ・古代文学講座 5 旅と異郷
- ・地図の政治学
- ・北欧社会の基層と構造 1－北欧の世界観
- ・「篠山藩青山家文書」 絵図目録：近世前期大阪周辺絵図 (2009)
- ・わくわく生き物地理学 (2009)
- ・バンクーバーはなぜ世界一住みやすい都市なのか
- ・日本の将来推計人口 平成 18 年 12 月推計
- ・日本の将来推計人口 平成 18 年 12 月推計の解説および参考推計(条件付推計)
- ・日本の市区町村別将来推計人口－平成 15 年 12 月推計, 平成 20 年 12 月推計 (2004)
- ・日本の都道府県別将来推計人口－平成 19 年 5 月推計 (2007)
- ・日本における近年の人口移動 第 6 回(2005)
- ・在留外国人統計 平成 14 年度版～20 年度版
- ・オリエンタリズム (1993)
- ・さまよえる近代：グローバル化の文化研究 (2004)
- ・グローバリゼーションの時代：国家主権のゆくえ (1999)
- ・江戸知識人と地図 (2010)
- ・高月町史 景観・文化財編 分冊一・分冊二・付図
- ・江見農書 一翻刻・現代語訳・解題 (2009)
- ・都市交通の成立
- ・市川健夫著作目録/市川健夫先生著作集刊行会編集 (2010)
- ・市川健夫著作選集 日本列島の風土と文化 1-4
- ・日本企業の国際フランチャイジング：新興市場戦略としての可能性と課題 (2010)
- ・中部を創る：20 人の英知が未来をデザイン (2010)
- ・地名の発生と機能－日本海地名の研究－

- *NATIONAL ABJECTION: The Asian American Body Onstage* (c2004)
- *Strangers from a different shore: a history of Asian Americans* (c1998)
- *California Place Names: The Origin and Etymology of Current Geographical Names* (2001)
- *Margins and mainstreams: Asians in American history and culture* (c1994)
- *The deathly embrace: orientalism and Asian American identity* (c2000)
- *East main street: Asian American popular culture* (c2005)
- *Asian America.Net: ethnicity, nationalism, and cyberspace* (2003)
- *Screening Asian Americans* (c2002)
- *The Global Migrations of Ornamental Plants: How the World Got into your Garden*
- *Neolithisation and landscape: NEOMAP internationalworkshop* (2008)
- *Ethnic Map of a part of ancient Serbia According to the travel-record of Milos S. Milojevic 1871-1877*
- *An Atlas of old Serbia: European maps of Kosovo and Metohija*
- *14th International Conference of Historical Geographers ABSTRACTS* (23rd-27th August 2009)
- *Le pouvoir des cartes*
- *Representer la ville*
- *Les premiers banlieusards: Aux origines des banlieues de Paris (1860-1940)*
- *Bobigny: banlieue rouge*
- *La banlieue parisienne: Cent cinquante ans de transformations*
- *52 week-end un europe*
- *Espaces vecus et civilisations*
- *Reading national geographic*
- *Time and the highland Maya*
- *Sacred places: American tourist attractions in the nineteenth century*
- *Nurturing the Seeds of Humanity* (2009/2010)
- *New faces in new places: the changing geography of American immigration* (c2008)
- *The American city: an urban geography* (1974)
- *Immigrants and the American dream: remaking the middle class* (c2003)
- *Perfectly Japanese: making families in an era of upheaval* (c2002)
- *Multiethnic Japan* (2001)
- *Deflecting Immigration: Networks, Markets, and Regulation in Los Angeles*
- *Global diasporas: an introduction* (1997)
- *National Geographic Traveler: Los Angeles*
- *Asian Americans: oral histories of first to fourth generation Americans from China*
- *Philippines, Japan, India, the Pacific Islands, Vietnam and Cambodia* (c1992)
- *Desert regions: population, migration and environment* (1999)
- *The making of a Japanese periphery, 1750-1920* (c1995)
- *Asian Americans: contemporary trends and issues* (c2006)
- *Discovering Japan: a new regional geography* (2009)
- *Geography and refugees: patterns and processes of change*
- *Trends in international migration: continuous reporting system on migration* (2004)
- *Migration Processes and Patterns: Research Progress and Prospects*

・ *Sunset lives : British retirement migration to the Mediterranean* (2000)

・ *A Landscape History of Japan* (2010)
(報告書)

・ 立正大学文部科学省学術研究高度化推進事業オープンリサーチセンター(ORC)整備事業 平成 20 年度事業報告書

・ 平成 20 年度児童関連サービス調査研究等事業報告書：小中学生の健全育成を目的とした安全教育カリキュラムと安全マップの作成－沖縄市を事例として－(2009)

・ 女性就業の多様化からみた都市空間のジェンダー化の地域的差異に関する研究(平成 17-20 年度科研費報告書)(由井義通)

・ グローバリゼーション下のインドにおける国土空間構造の変動と国内周辺部問題(平成 17-19 年度科研費報告書)(岡橋秀典)

・ 北海道・東北各地所蔵の幕末蝦夷地陣屋・囲郭に関する絵地図の調査・研究(平成 17-20 年度科研費報告書)(戸祭由美夫)

・ 少子化の要因としての成人期移行の変化に関する人口学的研究 第 1 報告書(2009)

・ 移民の適応戦略と前適応からみた移民社会・ホスト社会の地域生態学的比較研究(平成 14-16 年度科研費報告書)(矢ヶ崎典隆)

・ 学校教育・社会教育における地理情報システムの利用に関する研究(平成 16-19 年度科研費報告書)(伊藤悟)

・ 現代南アジアの地域システム 5 (広島大学現代南アジア地域システム・プロジェクト研究センター研究成果報告書)(2009)

・ 2008 年度・2009 年度地理学野外実習報告(中部大学人文学部歴史地理学科)

・ 地域調査実習報告書(金沢大学) 2008 年度「岐阜」

(雑誌・定期刊行物)

・ 愛知大学総合郷土研究所紀要 第 54 輯(2009)

・ 茨城地理 第 10 号(2009)

・ いま山形から No.73, 74(2009-2010)

・ エネルギー史研究 no.24(2009)

・ エリア山口 第 39 号(2010)

・ えりあぐんま 第 15 号(2009)

・ オーストラリア研究紀要 第 35 号

・ お茶の水地理 第 49 号(2009)

・ 大阪府立狭山池博物館研究報告 6(2009)

・ 沖縄地理第 9 号(2009)

・ 外邦図研究ニューズレター No.6(2009)

・ 観光科学研究 第 2 号(2009)(首都大学東京都市環境科学研究科)

・ 関西学院史学 第 37 号

・ 京都大学東南アジア研究所ニュース NEWSLETTER No.60

・ 京漁連だより 第 413-418 号(京都府漁業協同組合連合会)

・ 空間・社会・地理思想 第 12 号(2008 年)

・ 研究論叢 LXXIII- LXXIV(2009)(京都外国語大学)

・ 国士舘大学地理学報告 no.17(2009)

・ 駒澤地理 第 45 号(2009)

・ しま no.217-220(第 54 巻,第 4 号-第 55 巻 3 号)(財団法人日本離島センター)

・ 首都大学東京大学院都市環境科学研究科地理学教室年報 2008 年度

・ 石炭研究資料叢書 no.30(九州大学)

・ 千里地理成長記 2(2009)(関西大学文学部地理学地域環境学教室)

・ 総合資料館だより No.160-162(京都府立総合資料館)

・ 測量 第 74-75 号(日本測量協会関西支部)

・ 地域研究 vol.49,no.2, Vol.50, no.1(2009)(立正地理学会)

- ・地域研究年報 2009 31 (筑波大学人文地理学・地誌学会)
- ・地域と環境 No.8・9 山田誠先生御退官記念特集号; No.10 特集 地理学者青木伸好先生の世界, (2009) (京都大学大学院人間・環境学研究科「地域と環境」研究会)
- ・地域と社会 第12号 2009.9 (大阪商業大学比較地域研究所)
- ・地域学研究 第22号 (駒澤大学応用地理研究所)
- ・地域調査報告 11 (2008) 宮崎地域 (九州大学文学部地理学研究室)
- ・地学雑誌 2009 vol.118,no.2-no.6, vol.119, no.1 (2009-2010)
- ・地図情報 vol.29 no.1-4
- ・地質調査報告 vol.59, no.7/8, 9/10, 11/12; vol.60, no.1/2, 3/4,5/6, 7/8, 9/10, 11/12.; vol.61, no.1/2, 3/4, 5/6 (2008-2010) (産業技術総合研究所地質調査総合センター)
- ・地理 5月号 - 12月号 (vol.54)-1月号 - 4月号 (vol.55) (2009-2010)
- ・地理学研究 56～57 (2007～2008) (香川大学教育学部地理学研究室)
- ・地理学研究 第37号 (2009) (駒澤大学大学院地理学研究会)
- ・地理学研究報告 第20号 (2009) (千葉大学)
- ・地理学報告 第108-109号 (2009) (愛知教育大学地理学会)
- ・地理学論集 No.84 2008 (北海道地理学会)
- ・地理学評論 vol.82,no.3-6, vol.83, no.1-2 (2009-2010)
- ・地理空間 2008/Vol.1-1, 2, Vol.2-1,2 (2008-2009) (地理空間学会)
- ・地理研究 16-17号 (2006, 2010) (法政大学大学院)
- ・地理誌叢 第50巻第2号-第51巻第2号 (2009) (日本大学地理学会)
- ・東北学院大学論集 歴史と文化 第44号
- ・東北大学理科報告 第7輯 (地理学) vol.56, no.1/2
- ・東北文化研究所紀要 第41号 (2009) (東北学院大学)
- ・都市情報学研究 no.14 (2008) (名城大学都市情報学部)
- ・都市地理学 Vol.1-4 (日本都市地理学会)
- ・砺波散村地域研究所研究紀要 第26号 (2009)
- ・奈良大地理 第15号 (2009) (奈良大学地理学会)
- ・日本海地域の自然と環境 第16号 (2009) (福井大学地域環境研究センター)
- ・人間科学 第23-24号 (琉球大学法文学部人間科学科)
- ・人間文化 H&S 25-26 (2009) (神戸学院大学人文学会)
- ・文化史學 第65号 (同志社大学・文化史学会)
- ・法政地理 第42号 (2010)
- ・待兼山論叢 日本学篇 43 (2009) (大阪大学大学院文学研究科)
- ・明治大学大学院地理学研究報告 第3号 (2009)
- ・立命館地理学 21 (2009)
- ・歴史人類 第38号 筑波大学
- ・歴史地理学野外研究 第13号 (2009) (筑波大学)
- ・山形大学紀要 (社会科学) 第39巻第2号-第40巻第2号
- ・早稲田大学大学院教育学研究科紀要 別冊第17号, 1-2
- ・早稲田大学大学院教育学研究科紀要 no.20 (2009)
- ・no.68 (CD) 石狩湾海底地質図 (2009)
- ・AFRICAN STUDY MONOGRAPHS vol.30 no.2-4 (2009)
- ・AFRICAN STUDY MONOGRAPHS Supplementary Issue no.40 (2010)
- ・ASIAN AND AFRICAN AREA STUDIES 2008

no.08-2~no.09-2 (2008-2009) (京大アジア・7717地域
研究研究科)

・COSMICA AREA STUDIES XXXIX (2009) (京都外
国語大学)

・GEOGRAPHICAL REPORTS OF TOKYO
METROPOLITAN UNIVERSITY No.44 (2009)

・International regional science review. Vol. 21, no. 3
(1998)

・Southeast Asian Studies 東南アジア研究 vol.46,
no.3-vol.47-no.2

・2008 JAPANESE PROGRESS IN CLIMATOLOGY (法政
大学気候学談話会)

・Papers in regional science: the journal of the Regional
Science Association International. Vol. 70, no. 1 -Vol. 70,
no. 4 (1991); Vol. 71, no. 2 (1992); Vol. 72, no. 1- 4
(1993); Vol. 73, no. 1 - 4 (1994); Vol. 74, no. 1 - 3
(1995)

・Tsukuba geoenvironmental sciences vol.4 (2008)

<研究室の動静>

教室の事務は、引き続き三上純子さん
にお願い致しております。

本年度は、大学院博士後期課程2名、
修士課程6名、学部4回生10名、3回
生12名、聴講生1名、科目等履修生1
名が在学中です。

<3回生、聴講生4、新修士1回生の 自己紹介>

本年度は、新たな顔ぶれとして、3回
生12名、聴講生1名、修士課程1回生
2名を迎えました。皆さんに簡単に自己
紹介していただきます。

(3回生)

芦田 真隆

今年から文学部地理学専修への分属が決
まりました芦田真隆です。地理学につい
てはまだまだ初心者ですが、これから学
んでいく中で良い発見があればいいなと
思っています。よろしくお願いします。

江崎 洋平

新3回生の江崎洋平です。地理は小さい
頃から一番好きな教科・学問だったので、
地理学教室に入ることができてうれしい
です！これからどうぞよろしくお願いします。

神戸 陽菜子

初めまして。愛媛出身の神戸陽菜子です。
誕生日が3月3日のひな祭りなので、“ひ
なこ”という名前になりました。顔と名
前が一致するまで時間がかかってしまう
のでご迷惑をお掛けすると思いますが、
必ず覚えます！どうぞよろしくお願いします。

久保田 彰

初めまして、久保田彰と申します。趣味
は音楽・酒・旅行です。オーケストラで
チェロを弾いています。好きなお酒はウ
ィスキーです。中国、東南アジアに旅行
によく行きます。今後よろしくお願いします。

熊田 健太郎

はじめまして。地理学専修でお世話にな

ることになりました，岐阜市出身の熊田健太郎です。交通政策全般，地域振興，過疎地域などに興味を持っております。最近のマイブームはブックオフの105円コーナーに行くことです。残り2年間，楽しくやっていきます！

錠解 慈

はじめまして。錠解めぐみです★ 趣味は旅行で，長期休暇にはバックパックで海外に出かけています。旅行中の一期一会の出会いが私の宝物です。常に好奇心をもって常に aggressive であることを心がけています！よろしくお願いします！

須藤 梢

はじめまして，須藤梢です。私はフィールドワークがやりたくて地理学に来ました。とはいえ具体的にやりたいことがあるわけではなく，単純にどこかに出かけていくのが好きなだけです。興味がある地域はシルクロードです。よろしくお願いします。

谷井 啓太

はじめまして，今年度から地理学専修に配属されました谷井啓太です。地理学に関心をもち始めてから日は浅いのですが，これから勉強していきたいと思います。よろしくお願いします。

出口 貴大

出口 貴大と申します。地理学では都市の分野，特に構造や景観に興味はありま

すが，まだまだ「地理が好き」という漠然とした理由で地理学を専攻したので，ここで様々なことを学びたいと思っています。どうぞよろしくお願いします。

畠山 美樹子

初めまして，大阪出身の畠山美樹子です。具体的に何を勉強していくかはいまいち定まっていませんが，ひとまず色々な分野に触れていきたいと考えています。立命館大学のサークルに入っていて京大の友達が少ないので，どうぞよろしくお願いします。

前 未来

新3回生の前未来です。地理学について何もまだ分かりませんが，これからよろしくお願いします。色々教えてください。アラスカでオーロラを見たいです。

矢部 文斗

新たに地理学専修に仲間入りさせて頂くことになりました，矢部文斗と申します。他に何を書けばいいのか分かりかねますが，お酒の席があれば，予定の合う限りは行きますので，よろしくお願いします。

(聴講生)

大西 経二

初めまして！！今年地理学を聴講させていただきます大西です。よろしくお願いします。36年間小学校教師を経て，定年退職しました。その後5年間尼崎市で学童保育の仕事をしておりました。自分

のライフワークの一つとして地理学を勉強していきたいです。

(修士課程 1 回生)

嘉村 俊也

今年度より修士課程でお世話になります、嘉村です。広島大学教育学部よりやってきました。行動地理や交通地理に興味があります。今後ともよろしくお願い致します。

後藤田 遙

はじめまして。大学院からこちらの研究室でお世話になります、後藤田と申します。学部では文化人類学を専攻しておりました。わからないことだらけで皆さんにご迷惑をお掛けすることもあると思いますが、どうぞ宜しくお願い致します。

趙 政原

中国からの留学生で、趙政原と申します。学部では日本語、日本文化を専攻し、日本に大きな関心を持っています。地理学の視点から文化産業を研究しようと思い、これから地理学研究室で充実した生活と送りたいと思います。よろしくお願い致します。

〈2009年度の実習旅行〉

2009 年度は、10 月 19 ～ 22 日まで、山口県下関市において、2 回生・3 回生の計 14 名が調査を行い、報告書を作成しました。

〈学部卒業生・院生の進路〉

＊学部卒業生

野瀬 美咲

朝倉 慎人 文学研究科 (修士課程)

日下 直人 伊藤忠 (株)

永見佳央里 文学研究科 (修士課程)

宮本 琢也 ナナオ (株)

＊修士課程

松本 貴裕 文学部科目等履修生

〈院生の研究状況の報告〉

今年度までの院生の研究状況をお知らせします。以下は、閲読を経た論文のリストです。

D3 沖 慶子

・牧口常三郎著『人生地理学』の同時代評, 地理科学 58-2, 65-91 頁 (2003)

〈2010年度講義題目〉

＊講義 (系共通科目) ＊

米家泰作・田中和子 人文地理学概説

＊特殊講義＊

教授 小林致広 先住民族と資源を
めぐる領域編成

教授 石川義孝 在留外国人の
地理学的検討

教授 田中和子 重力モデルと
空間行動に関する諸問題

准教授 米家泰作 地理的知の
歴史地理学

人環教授 金坂清則 人文地理学に
おける人物・人物群研究
地球環境学堂教授 小方 登 画像分析
の原理, およびその応用
としての歴史景観復原

理学部准教授 堤 浩之 地形学
 講師 藤巻正己 東南アジアの
 ジオ-ヒストリー・心象風景
 講師 石崎研二 地理空間分析
 講師 島津俊之 地理学史研究の諸問題
 講師 松原 宏 経済地理学の
 現代的課題
 講師 境田清隆 気候と人間
 講師 妹尾達彦 中国の都と都市網の
 歴史地理

＊演習Ⅰ—地理学研究法—＊

小林致広・石川義孝・田中和子・米家泰作

＊演習Ⅱ—4回生演習—＊

小林致広・石川義孝・田中和子・米家泰作

＊講読＊

教授 石川義孝 英語地理書講読
 教授 田中和子 ドイツ地理書講読
 人文研助教 田中祐理子 フランス地理
 書講読
 人文研助教 小野寺 史郎 中国地理書
 講読

＊地理学実習＊

田中和子・米家泰作

＊大学院演習—地域の諸問題—＊

小林致広・石川義孝・田中和子・米家泰作

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

事務局から

<地理学談話会2009年度会計報告>

(2009年4月1日～2010年3月31日)

【資金会計】

<収入>

年会費	124,000
寄附金	0
利子	115
前年度繰越金	568,822

計	692,937

<支出>

運営への振替	143,994
郵便振替手数料	7,240
次年度への繰越	541,703

計	692,937

【運営会計】

<収入>

資金会計からの振替	143,994
秋季懇親会会費	64,000
春季懇親会会費	61,400

計	269,394

<支出>

秋季懇親会	93,963
OB 交流会経費	4,470
春季論文発表会経費	61,400
会報・名簿等印刷費	5,000
会報製本費用	13,965
通信・文具等費	88,796
弔電・供花等	1,800

計	269,394

<訃報>

前回の会報以降、次の方々がお亡くなりになりました（お亡くなりになったとのお知らせをいただいた方を含みます）。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。（確認分、括弧内は卒業年、敬称略）

<訃報>

斎藤 晃吉（1943 年卒）

小池 洋一（1943 年卒）

川喜田 二郎（1943 年卒）

山口 平四郎（1934 年卒）

當麻 成志（1947 年卒）

<住所不明者についてお願い>

以下の会員の住所が不明です。ご存じの方は、談話会事務局までご一報ください。（数字は卒業年、敬称略）

安福 伸光（1997 年卒）

李 禧淑（2001 年博）

池内 麟太郎（1973 年卒）

石角 強（1970 年卒）

石橋 弘嗣（2006 年卒）

石原 大嗣（1997 年卒）

石原（林）美歩（1995 年卒）

石村 裕輔（1992 年卒）

今井 平八（1944 年卒）

岩部 敏夫（1991 年卒）

遠藤 元（1996 年卒）

遠藤 正雄（1978 年卒）

太田 隆文（1997 年卒）

大野 宏（1992 年卒）

大山 晃司（1995 年卒）

岡本 靖一（1967 年卒）

岡本 美津子（1987 年卒）

興津 俊之（1991 年卒）

小口 稔（1991 年卒）

小野寺 伴彦（2000 年卒）

楓 雅之（泰昌）（1945 年卒）

片寄弘也（2004 年卒）

勝村（赤座）眞知子（1973 年卒）

川合 大地（1998 年卒）

川添 和明（1995 年卒）

貴志 謙介（1981 年卒）

木地 節郎（1949 年卒）

北口 卓美（1990 年卒）

児玉 高太朗（1990 年卒）

西井（小林）理子（2002 年卒）

坂部 誠治（1991 年卒）

島崎 郁司（1996 年卒）

嶋野 浩一朗（1997 年卒）

清水 究吾（1998 年卒）

新谷 泰久（1990 年卒）

神力 弘幸（1993 年卒）

鈴木 伸国（1988 年卒）

田島 渡（1948 年卒）

都子 屋（1940 年卒）

中山 耕至（1993 年卒）

那須 久代（1988 年卒）

檜崎（藤川）こず恵（1998 年卒）

南部 一寿（1999 年卒）

西尾 正隆（1970 年卒）

西沢 仁晴（1974 年卒）

西山 隆彦（1995 年卒）

能勢（朝倉）正寛（1962 年卒）

平井 素子（1996 年卒）

福田 新一（1971 年卒）

前田 奈実（1999 年卒）

松本 弘史 (1983 年卒)
御手洗 央治 (1993 年卒)
山口 一郎 (1980 年卒)
山下 良 (1989 年卒)
山田 (児玉) 憲子 (1970 年卒)
山中 一高 (1991 年卒)
吉野 修司 (1995 年卒)
吉村 健志 (2002 年卒)
六嶋 美也子 (1993 年卒)
渡邊克己 (2004 年卒)

＜オープンキャンパス：2009年度の 報告と2010年度のお知らせ＞

2009 年 8 月に京都大学のオープンキャンパスが開催されました。文学部の見学・説明会もこの一環として、6 日に行われました。文学部の全体説明のあと、各自が希望する専修の研究室を訪問してもらいました。

2010 年度の京都大学主催の全学オープンキャンパスについては、
<http://www.kyoto-u.ac.jp/>
をご覧ください。文学部の見学・説明会は、
8 月 11 日（木）の予定です。

地理学教室では、学部だけでなく大学院の受験志望者や、中学高校の教員の方々、また、一般の市民の方にも来て頂けるような企画を検討しております。今年度は、10 月 30 日（土）に開催を予定しています。詳細な日程や参加申込の案内

は、地理学教室のホームページ、
<http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/geo/>
に、掲載する予定ですので、そちらをご覧ください。

＜2010年度秋期地理学談話

のお知らせ＞

本年は、下記のようなプログラムを予定しております。どうぞお気軽にお越しくださいますよう、お願いいたします。

記

日 時：10 月 30 日（土）

午後 1 時—5 時

場 所：文学部新館 1 階

第 1・2 講義室

◎教室見学会：午後 1 時より

◎OB 交流会：午後 2 時より

講師（交渉中）

◎講演会：午後 3 時半より

安仁屋 政武 氏（1967 年卒）

◎懇親会：午後 5 時より

（文学部新館 第 1 講義室）

＜地理学教室所蔵の

写真資料について＞

地理学教室百周年事業に関わる資料整理の際、地理学共同研究室や総合博物館地理作業室のロッカーの中から、地理学教室関係者の古い写真が数百枚、出て参りました。

すべて、デジタルデータとして保存した上で、アルバムに仮整理しております。撮影時期はもちろん、写っておられる方々のお名前もわからないものが多々ございます。

卒業生の方々に見ていただき、写真に関する情報のご提供や、整理方法のご教示などをいただければと願っております。

どうぞ、お気軽に教室をお訪ねいただき、アルバムをご覧くださいませよう、お願い申し上げます。

☆一年あたり千円を目処として、それぞれの会員の方々に、談話会の運営経費へのご協力をお願いしております。随時、ご支援をお願いいたします。納入の際は、同封しております「郵便振替用紙」をご利用下さい。

京都大学文学部地理学談話会 会報 第21号

発行日 2010年5月15日

発行者 地理学談話会

〒606-8501

京都市左京区吉田本町

京都大学文学部 地理学教室内

Tel: 075-753-2793 (直通)

発行所 京都大学文学部地理学教室

URL <http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/geo/>